町家 大星シェアオフィス

築約 300 年の歴史的家屋。

維持費を補填しながら残していきたい

伊丹市にある、築約 300 年の元・造り酒屋の家屋が、シェアオフィスとして利用されている。

建物はできるかぎり元の趣を残して改築されており、店名も酒の銘柄「大星（だいぼし）」の名前をとって「町家 大星シェアオフィス」という。看板も控えめなので、一見してシェアオフィスと気がつく人は少ないかもしれない。隠れ家的なシェアオフィスだ。オーナーの筥（やの）ご夫妻に、この建物の歴史と、ここをシェアオフィスにしようと思った理由など伺った。

維持か取り壊しか…

一番古い記録では、江戸後期の天保 13 年（1842 年）の年貢酒銘柄に「大星」の名前が残っている。明治期になって、筧さんの曽祖父にあたる方が、大星の株を買って経営を引き継いだのだそうだ。その後、筧さんの祖父の代で酒屋は辞めたが、それまで借りて営業していたこの家屋を購入した。筧さんのお父さんは会社員だったが、ご両親とも亡くなるまでこの家屋に住み続けた。

結婚と同時に神戸に移り住んでいた筧さんご夫妻に、ご両親が亡くなった後のこの家屋をどうするか、の問題が突きつけられた。

壊すのはもったいない！

「取り壊そうかという案もありましたが、裕福な商家独特の特徴も見られるこれだけの歴史的な建物を壊してしまうのは、もったいない気がしました」
放送大学で近世建築を学んでいた奥様の意見もあり、工務店に相談してシェアオフィスとして残すことを決めた。
「特別なスキルがなくても、スペースを貸すだけならできると思いました」

改築工事は、まず、阪神・淡路大震災で傾いていた家屋全体を起こすことから始まった。古い柱はそのまま使ったが、全体に耐震補強が必要だった。漆喰は全部塗り直し。三和土（たたき）に敷かれている石など、筧さんご夫妻の希望で敢えて残したものもある。
「結果的に家を２軒建てるくらい費用がかかりました」ご主人の耕治さんは笑って言う。ただ、この日本家屋の雰囲気が良くて、ここを利用してくれるお客さんたちのことを思うと、後悔はない。

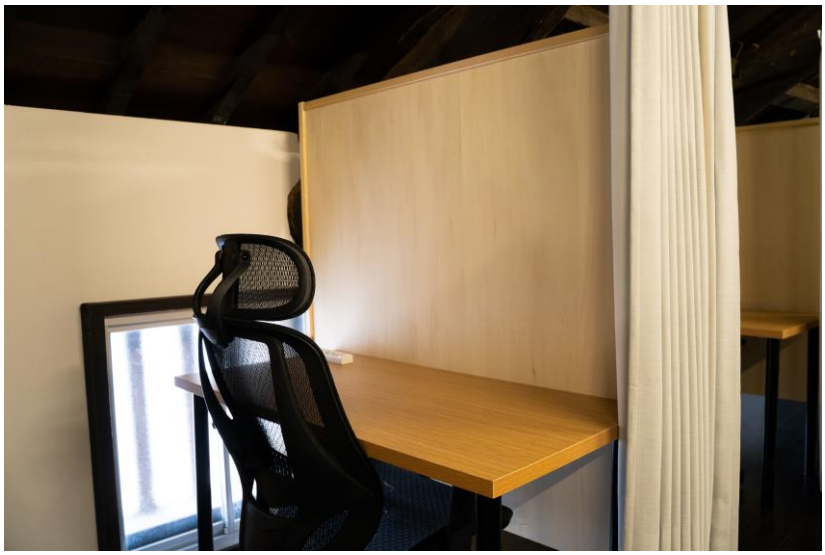
落ち着けるシェアオフィス

　黒っぽい板張りの床。日本家屋によく会う優しい照明。外観こそ少し意外だが、内装はとてもリラックスできる雰囲気で、シェアオフィス、コワーキングスペースとして理想的な空間作りに成功している。

　できた当初は日本家屋の好きな女性客が多かったが、最近は男性も増え、会社員やフリーランス、学生など様々な人に使ってもらっている。

　キッチンもついているが、使い方は未定。衛生面など考えると、飲食を組み込むのは二の足を踏む。

店内でマルシェを開催したり、早朝キャンペーンをやってみたり、ご夫婦でアイデアを出し合っていろいろ試してみるが、どれも極めるのはなかなか大変なのだという。



高齢の移住者の方もどうぞ

「伊丹は大阪、神戸、京都とどこへ出るにもアクセスが良く便利ですよ。移住してくるとしたら、最近どんどん建っているマンションが狙い目でしょうか」

若い人の移住もさることながら、現在あまりアクセスの良くない場所にお住まいの年配の方が、医療や買い物などにも便利なこの辺りに移住するのもいいのではないか、と耕治さんは言う。

確かに、高齢者にとっては、都市部のほうが便利に暮らせるという面もある。

例えば、現在交通アクセスのあまり良くない地域にお住まいの方が、退職を機に便利な伊丹市に移住し、町家 大星シェアオフィスでセカンド・キャリアの構想を練るという選択肢もあるのではないだろうか。

キャプション

＜220129_052＞

オーナーの篦（やの）ご夫妻

＜220129_042＞

江戸後期から造られていた清酒「大星」。篦さんの曽祖父が経営を引き継いだ

＜220129_038＞

放送大学で近世建築を学んだ奥様の意見で建物を残すことに

＜220129_066＞

和土（たたき）に敷かれていた石は、ご夫妻の希望でそのまま使用した

＜220129_022＞

落ち着いた雰囲気のコワーキングスペース。日本家屋好きな利用客も多い

＜220129_045＞

2 階の固定ブース

＜220129_074＞

一見してシェアオフィスには見えない店構え